
Z I G Z A Gセブンティーン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Z I G Z A G セブンティーン

【Nコード】

N 3 7 2 5 P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幼馴染みと付き合い合っているけれど十七歳の今は喧嘩ばかり。そんな二人はどうなるのか。シブがき隊の歌からヒントを得た作品です。

第一章

ZIGZAGセブンティ

イン

「だからあの時はね」

「違うだろ、いたんだろ」

俺は嫉妬丸出しにして彼女に言った。

「相手がな」

「相手って何のことよ」

「だから男だろ」

俺達は学校の中で言い合う。廊下でまともに言い合ってるから行き交う他の連中が見ている。けれどそれに構わず言い合っていた。

「俺以外のな。いるんだろ」

「あのね、何でそうなるのよ」

「違うっていうのかよ」

「あんた馬鹿!？」

彼女の呆れた声が来た。

「っていつか何よそれ、何でそうなるのよ」

「昨日電話してた時おかしかっただろ」

俺は昨日の話を出した。

「あれ聞いたら誰だってな」

「あんた私の家来たことあるわよね」

彼女は俺の言葉にむっとして返してきた。

「そうよね。それも何度も」

「うどん屋だよな」

「そうよ。そこに誰がいたのよ」

「親父さんとお袋さんと」

俺は頭の中でこいつの家族を思い出しながら言った。

「爺さんと婆さんと御前の兄さんが二人に弟さんが三人だったよな」

「男何人いるのよ」

「七人だよ」

随分と大家族だ。書く言う俺も兄貴がいて姉貴がいて下に弟と妹だ。何と兄弟姉妹全部揃っている。嬉しいのかそうでないのか。

「多いな」

「それだけいれば当たり前でしょ」

俺に口を尖らせて言ってきた。

「誰かの声が入ってもね」

「そうなるのかよ」

「しかもあんたが昨日電話してきた時間って」

その話にもなった。

「六時位だったわよね」

「確かそうだったな」

俺は言われてその時間を思い出した。確かにそんな時間だった。

外が真つ暗にはなっていないのは覚えている。結構あやふやだが。

「そんな時間だったよ」

「お客さん一杯いたじゃない」

このことも言われた。

「おじさんとか学生さんもいるし」

「それがかよ」

「そうよ。あんたのお家だってそうだったでしょ」

俺の家は八百屋だ。その時間ちよつとさぼって電話をしたって訳だ。その後で親父とお袋にちよつと小言を言われたのは気にしていない。

実は俺達は同じ商店街で暮らしている。それこそ幼稚園に入る前から一緒だ。高校も同じで十七になった今じゃこうなってるって訳だ。

「忙しいでしょ、夕方は」

「お客さんが多くてな」

その時間は仕事帰りの人が主なお客さんだ。

「ちょっとな」

「そうよ。全く」

ここまで言って溜息だった。

「あんたって変に嫉妬深いんだから」

「悪いかよ」

「ええ、悪いわよ」

即答だった。

「お陰でいつもいつもね」

「いつもいつも。何だってんだよ」

「喧嘩じゃない」

うんざりとした顔でその言葉を言われた。

「しょうがないわね」

「ふん、御前がおかしなことしなかったらな」

「しないわよ」

「絶対にかよ」

「そうよ、絶対によ」

「だったらいいんだけどな」

何かこんな感じで言い合ってた。不機嫌な学校の時間になった。その後の授業の後で屋上で何人かのツレと話をしていた。その話の内容は。

第二章

「なあ、御前さ」

「さつき彼女と喧嘩してたよな」

適当にだべって隠れて持って来た漫画雑誌なんかを開きながらそのうえで話をしていた。その中で俺に言ってきたわけだ。

「そうだよな」

「廊下で」

「ああ」

俺はその言葉にうんざりとした口調で応えた。

「そうだよ」

「まただよな」

「最近毎日みたいに喧嘩してるよな」

「御前等大丈夫か？」

「そんなに毎日喧嘩して」

「ほつといてくれよ」

俺はこう言い返した。

「そんなの御前等に関係ないだろ」

「まあな。それはな」

「俺達には直接関係ないさ」

「ただな」

「喧嘩を続けてたらな」

どうかというのだった。それだった。今度はだ。

俺からだ。こうツレ達に話した。

「いいだろ？別にな」

「いいっていいのかよ」

「じゃあ今もかよ」

「喧嘩してもか」

「それでもいいっていいのかよ」

「そつだよ。そんなの俺の勝手だろ」

これが俺の言葉だった。

「別にな」

「まあそつだけれどな」

「御前の話で俺達には関係ないさ」

それは周りも認めることだった。言うまでもないことだった。

「けれどな。何かしょっちゅう喧嘩してるだろ」

「そついうの見てたらな」

「心配になるんだよ」

「心配か」

俺は学校の売店で売っている牛乳を飲む手を止めてその言葉に反応した。三角の紙コップでストローで飲むやつだ。俺はこれが好きだ。

「俺達がかよ」

「そつだよ。別れるなよ」

「折角付き合ってるんだからな」

「それはな」

「わかつてるさ」

そのつもりはないだからはっきりと答えた。

「そんなことはな」

「まあな。本当にうまくやれよ」

「仲良くしにくくてもな」

「別れるな」

またこの言葉を告げられた。

「喧嘩別れなんて最悪だぞ」

「だからそれはなるなよ」

こつ周りからも言われる俺達だった。とにかく何か顔を見合わせればその時の程の差こそあれ言い争いになる。それはデートの時でもだった。

映画館で話題の映画を観た帰りだ。向こつから言ってきた。

「あのね、さつきね」

「何だよ」

道を歩きながらだ。俺に言ってきた。

「擦れ違った人だけれど」

「擦れ違った？」

「そうよ、綺麗な人」

こんなことを言ってきた。

「見てたでしょ」

「誰だよ、それ」

「あの大学生みたいな。髪の毛の長い」

そんな話を続けてくる。

「ミニスカートの。その人よ」

「そんな人いたか？」

「さつき擦れ違ったじゃない」

「そうか？」

「そうよ。見てたでしょ」

ここでは目を顰めさせて俺に言ってくる。本当に面白くなさそうに。

「その人」

「あのな。いちいちそんなの覚えてるか」

俺は怒った顔になってこう言い返した。

第三章

「そんなことな」

「白を切るの？」

「何でそうなるんだよ」

「だって」

今度は口を尖らせてだ。俺に言ってきた。

「あんたっていつもそうだから」

「いつもかよ」

「いつもじゃない」

いつもの売り言葉に買い言葉だった。

「すぐ他の女の人見るんだから」

「あいな」

俺は少しうんざりとした顔になっていた。それを自覚しながらだった。

「目に入ったら見たってことになるのかよ」

「そうよ」

「無茶言っな。じゃあ何だって言えるだろうがよ」

「要はそうならないように気をつけることよ」

「目に入るのなんて意識できるかよ」

「できるわよ。視線逸らしなさいよ」

「一瞬でも入ったら駄目なんだろうが」

その論理ならどうなるか。俺は考えながらまた言い返した。

「それって無茶苦茶にも程があるだろ」

「だから気をつけなさいって言ってるの」

「気をつけられるか、そんなこと」

「そうよ」

ここでも言い合う俺達だった。何から何まで喧嘩ばかりだった。そして俺達のその喧嘩はだ。向こうの親父さんとお袋さんにも伝わ

った。

それでだった。俺達はそのうどん屋に呼ばれた。土曜の閉店後だ。もう誰もいなくなった店の中で向かい合って座ってた。親父さん達に言われた。店の中はまだ灯りが点いたままなのに寂しい感じがした。お客さんがいなくなった後の店の寂しさがそこにあった。

「聞いてるぞ、色々とな」

「あんた達のことをね」

俺達は四人用の席に座っていた。向こうには親父さんとお袋さんがいつ。俺と彼女は親父さん達と向かい合う形で横に並んでいる。そこで言われた。

「喧嘩ばかりしてるそうだな」

「それも毎日」

「悪いの？」

彼女がまず言った。

「それが」

「そう言うか」

「相変わらず気が強いわね」

「ええ、悪い？」

悪びれずに言う。本当に鼻っ柱が強い。

「だってね。こいつが悪いのよ」

「おい、俺かよ」

俺も口を尖らせて反論した。

「俺が悪いのかよ」

「あんたがすぐ他の女の子見るからでしょ」

「そういう御前だってな」

俺はすぐに言い返した。

「何かっていうと他の男をな」

「私が何したってのよ」

「笑顔向けてな。あれは何だよ」

「笑顔って何よ」

「他の奴に気があるんだろ」

こう言うのだった。

「違うのかよ」

「あのね。学校とかお店にいたら他の人と会って話をしたりするでしょ」

こいつもこいつで言う。いつも通り。

「そのの何処がおかしいのよ」

「おかしいだろ。それってよ」

「あんただってそうじゃない」

何か話していて堂々巡りになってきている気がした。けれどそれでも俺達はムキになってた。それで言い合う。お互いにだ。

「他の娘見て」

「御前この前な」

昨日のことを思い出してだった。

「俺が小学生の女の子見ても言っただよな」

「それが悪いっていうの？」

「そりゃないだろ。相手小学生でも三年位だったぞ」

「七年後にはいい歳になってるじゃない」

「七年ってどれだけあると思ってるんだ」

俺にとっちゃ七年はとんでもなく長い時間だ。それこそ小学校教育より長い。そんな長い年月を一体どうしろかと思った。

「御前どんだけ嫉妬深いんだよ」

「嫉妬じゃないわよ」

「じゃあ何だっというんだよ」

こんな調子で俺達はとことんまで言い合った。もう親父さんとお袋さんのことは忘れていた。それで二時間位言い合うとだった。

第四章

お互いに疲れてしまってた。肩で息をするようになった。そこで、
だった。

「まあそういうことだな」

「そうね」

親父さんとお袋さんが優しい声で俺達に言ってきた。

「御前等そのままいけ」

「仲良くしなさい」

「仲良くって」

「何処がなのよ」

俺達は親父さん達に同時に顔を向けて反論した。

「俺達って何かあったら本当に」

「言い合ってるけれど」

「喧嘩する程ってやつだ」

「そういうことよ」

しかし二人のことはこんな調子だった。

「そうやってお互いを見ているからな」

「そうなるのよ」

「そうか？」

「そうなの？」

これまた二人同時に声をあげた。

「俺達ってそうなのか」

「喧嘩ばかりしてるのに」

「まあそれがわかるのはな」

「大人になってからだけれどね」

今じゃないというのだった。十七歳の今じゃないってことだった。

「まあ今は盛大に喧嘩しろ」

「お互いがよくわかるし」

「盛大にかよ」

「していいの」

「俺達だってそうだったしな」

親父さんが満面の笑顔で言ってきた。

「それはな」

「そうよ。結婚する前はね」

「だったよな」

親父さんは今度はお袋さんの言葉にその笑顔で返した。俺が知っている限りこの二人はいつも仲がいい。息もぴったり合っている。

けれどそれがだ。昔は違うという。俺はそれがぴんとこなかった。しかしだった。二人はさらに話をするのだった。

「それでお互いわかったからな」

「そうした喧嘩はするものよ」

「そうしたか」

「喧嘩していいの」

「そうだ、今はぶつかれ」

「どんだんね」

親父さんとお袋さんはまた俺達に言う。

「それで幸せになれよ」

「いいわね」

「何かよくわからないけれど」

「応援してくれるの」

「ああ、そうだ」

「その通りよ」

また笑顔で返す二人だった。

「それじゃあな」

「今は仲良く喧嘩しなさい」

俺達に言うことはそのことだった。とりあえず俺達の仲は十七の時はそんなのだった。

その十七だ。高校生活三年目、卒業が近付いてきていた。

俺はだ。ある時彼女にそのことを尋ねられた。学校の帰りに二人で喫茶店に入ってた。そこで声をかけられたのだ。

「ねえ。卒業したらね」

「何だよ、卒業したらって」

「あんたどうするのよ」

こう俺に尋ねてきた。バナナジュースを飲みながら。俺は俺でホットコーヒーを飲んでいる。格好つけてそれを飲んでいた。

その俺にだ。尋ねてきたのだった。その尋ねてきたことは。

「大学行くの？」

「そんな訳ないだろ」

俺はそれはすぐに否定した。

「俺の頭で大学とかないだろ」

「そうよね。じゃあ就職よね」

「ああ、そうだ」

その通りだと答える俺だった。

「スーパーに就職するんだよ」

「スーパーになのね」

「そうだよ。もう決まっただよ」

それが決まるのは早かった。本当にあっさりだった。どうも家が八百屋をやっていることがそのことによく利いたみたいだ。

第五章

「地元の店に入ることになるな」

「そう。頑張つてね」

「そっちはどうなんだよ」

俺は俺で問い返した。

「就職か？それとも進学か？」

「私は喫茶店にね」

「そこに入るのかよ」

「そう、喫茶店っていつでも和菓子系のね」

つまり甘味処ってわけだ。そこだというのだ。

「そこで修業するから。お金も稼ぎながら」

「将来の為かよ」

「家、うどん屋だからね」

そうした意味じゃ俺と同じだった。やっぱり同じ商店街で育っただけはあった。

「家は一番上のお兄ちゃんが継ぐけれど」

「御前も暖簾分けか？」

「そんなつもりはないけれどね」

「そうか」

「そうよ。そうね、お互い就職するのね」

「そうだな。高校を卒業したらな」

「じゃあ」

その話をしてからだ。俺にこんなことを言ってきた。

「部屋、借りる？」

「部屋！？」

「そう、アパート」

ぶしつけにこんな話をはじめてきた。

「アパートにはいる？それじゃあ」

「何でそんな話になるんだよ」

「だって。私達付き合ってるから」

「だからだつてのかよ」

「そうよ。だからね」

「一緒にか」

「嫌？」

少し真剣な顔で尋ねてきた。

「それって」

「嫌じゃないさ。けれど急に言われたからな」

「それでなの」

「そうだよ。すぐに答えるには心の準備が必要だろ」

「そういうのはすぐに言うものよ」

いつも通り無茶なことを言いやがる。心の奥底から思った。

「だからね」

「すぐにかよ」

「そうよ。それでどうなの？」

また俺に尋ねてきた。

「一緒に住む？どうする？」

「嫌って選択肢はないだろ」

俺はこう言つてやった。

「そつだろ」

「そうよ。じゃあいいわね」

「ああ。高校を卒業したらな」

「一緒にね」

俺ににこりと笑つて話してきた。

「それじゃあね。二人一緒にね」

「暮らすか」

そんな話をしてだつた。俺達は十八になつて高校を卒業した。それからすぐに一緒に暮らしだして結婚して今も一緒にいる。子供も何人かできた。俺達はもう十七じゃない。けれどその十七の時のこ

とは今もはつきりと覚えている。今にして思えば楽しい時だった。

ZIGZAGセブンティーン 完

2010・12・7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3725p/>

Z I G Z A G セブンティーン

2010年12月8日00時10分発行